

有形文化財
【絵画】

しほんちやくしよくとうにんたくちねんさとぬしべーちんせいぎょうがぞう
紙本着色東任鐸(知念里之子親雲上政行)画像

つけたり 一、きょうくんじゅつかじょう 一、かけものいりばこ
附 一、教訓十箇条 一、掛物入箱

指定年月日/2011(平成23)年12月13日
所在地/登野城4-1(八重山博物館)



東任鐸(1779~1825)は首里士族で、1835年から1838年まで八重山在番を勤めた人物である。画像上部の自筆の賛によると、この肖像画は在番の任期を終え、首里に戻った翌年の1839年、61歳の時に絵師に描かせたもので、八重山の現地妻との間にもうけた息子・真山戸へ贈ったことが記されている。作者については特定できないが、王府の絵師を含め、首里近辺で活躍していた絵師を想定できる。

肖像画は椅子に腰掛けた正面像で、琉装に大帯を締め、右手に金箔を散らした白扇を持ち、黄冠をかぶっている。顔の描写は毛髪や髭が白黒の細かい線で写実的、立体的に表現されている。黄冠や衣装の唐草模様、大帯の模様なども繊細に描かれるが、背景とともに平面的に描かれることで、顔の描写を強調する工夫がなされている。

この肖像画は、近世琉球における上級士族を描いたものとして希少なだけでなく、衣装の柄や色、素材が身分により細かく制限されていた当時の身分制度を知るうえでも貴重である。

県指定

有形文化財
【絵画】

しほんちやくしよくみやひらちやうえんがぞう
紙本着色宮平長延画像

指定年月日/2011(平成23)年12月13日
所在地/登野城4-1(八重山博物館)



この画像は、大浜間切の頭職を勤めた宮平長延の肖像画である。長延は1674年に生まれ、1749年に獄中で自決している。八重山の林業、土木、治水に関わる事業を多く手掛けた人物であり、1745年、その報告のために首里へ上国した際、尚敬王より褒賞され、国分煙草や百田紙を下賜されている。

肖像画は、画面いっぱいに人物が描かれ、龍模様の大帯と緑地に唐草模様の琉装をまとい、唐草模様の黄冠をかぶり、右手に扇を持つ。顔はあごが細く、やや色黒の白髪の翁が赤地に菊唐草模様の赤い敷物の上にあぐらをかいた構図となっている。描かれた風貌から、長延が上国した際に描かれたと考えられる。巧みな筆致や他の琉球の肖像画と共通する構図から、当時の王府の絵師を含めた首里周辺で活躍していた絵師の手によるものと思われる。本画像は、琉球王国時代の八重山士族を描いた現存する唯一の肖像画である。琉球人の手による肖像画の特徴をよく示すもので、琉球絵画史上極めて貴重な作品である。